

拾遺

鹿をさして馬と云人有ければかもをもおしとおもふ也けり、又あほうは秦阿房宮號に出たる詞也とぞ、又たわけとは田分也といふ、未詳

〔皇都午睡 三編上〕上方にて買て來るを、江戸にては買て來る○中 あほうをべらば、馬鹿者をとんちき、

〔足薪翁記〕愚なる者の異名

上二番又二のきれ 紀三井寺 南華

是等みな愚なるもの、事をいへるなり、智ある者を一にたとへ、愚なるものを二番といひ、紀三井寺は順禮の札所の二番なるにより、又其名をおふせしなり、南華の事は、色道大鑑延寶六年南

華戯れたる者をいふ、むかしは鈍なる者の異名にはいはず、常とかはりたる人をいへり、其意は、

南華は莊子が寓言の儒にかはりたるによりて、いひたる名ならんを、今は誤りて鈍なる方にこ

れをよすとあり、浮世物語萬治年 諸國に傾城町をたていん女多くこめおきて、必だての二番な

るきみる寺のともがら、中頃は南華とやら名づけし、いかなる故ならん、莊子は寓言とて、なき事

をあるやうに書きたる道人也けるを、南華の篇といふ、さだめてうそつきといふ心にや、たゞう

つけたるを、今は南花と名づくるなり、○中 朱雀遠目鏡延寶九年 下の卷上○中 に、大阪屋太郎兵衛

内野瀬といふ格子女郎を評する詞に、面體も姿も大方なり、是も御心二のきれ、廿八夕には高直

なり、

下たくらだ。是も愚なるものをいふ、文字も意も未考、醒睡笑、大本二の卷に、少したくらだのあ

りしが云々と記して、愚なる者の話あり、此冊子元和九年の作なれば、いと古き流言なり、子孫鑑

寛文十二に、一人の文珠より十人のたくらだといふ事あり、文珠の如き智をもちたる一人より、

愚なるもの、十人の工風がよきといへるなれば、意はよく聞えたり、○下